苦悩の治癒

アルゼンチン、メンドサ、プンタ・デ・バカス
１９６９年５月４日

もし、今日ここで賢者の教えを請うだろうと集まったならば、あなたは来た場所を間違えている。なぜなら本当の知恵とは文字や言葉で伝えられるものではないからだ。本当の知恵というものは、真実の愛が心の奥底で見つかるのと同じように、あなたの意識の奥底で見つかるものだからだ。

もしこの男の話を聞くことで、後にこの男に対して反論できるだろうとか、誹謗者や偽善者にあおられてここに来たのならばあなたは来た場所を間違えている。なぜなら、この男はあなたから　何かを要求するつもりもなければ、あなたを利用するつもりもない。それは詰まるところこの男はあなたを全く必要としていないからだ。

あなたが耳を傾けているこの男は、宇宙の法則を知るわけでもなく、歴史の法則に精通しているわけでもない。そして世界の人々がどのような関係にあって統治されているのかにも無知な人間だ。都会を離れ、また都会が放つ歪んだ野望から離れたこの山脈の高台で、この男はあなたの良心に向かって話しかける。都会では毎日が闘いであり、希望が死によって挫かれる。そして愛が憎しみに取って代わり、許すという行為が復讐に転ずる。裕福な者と貧しい者とが入り混じる大都会に、そして膨大な人類の平野に苦しみと悲しみがのしかかっている。

痛みが体を襲う時、人は苦しむ。飢えが体を支配する時、人はまた苦しむ。しかし、肉体の痛みや飢えだけがあなたを苦しませるのではない。体を蝕む病、そして病気が及ぼす数々の影響もあなたを悩み苦しませるのである。

苦悩には２つの種類があることを理解してほしい。１つは病にかかった時の苦みである。これは飢餓の問題が社会が正当に繁栄すると共に後退できるはずなのと同様に、科学の発展によって後退する。

もう1つは病による肉体の痛みなどとは別に、病がもたらす様々な悩みや苦しみである。目や耳、体に不自由があれば人は困難にぶつかる。これは、身体そのもの、または体の病気がもたらすものではあっても、それはあなたの意識の中に存在する苦悩だ。

科学の進歩をもっても、正義の進化をもってもなくならない苦悩がある。それは意識の中にのみ存在するもので、信念、生きる喜び、愛情の前に姿を消していく。そしてこの苦しみは、あなたの意識 の中に存在する暴力に元を正すということを理解しなくてはならない。

人は持っているものを失う事を恐れて悩み、既に失ったがために苦しみ、そして何かを手に入れようと必死になることでまた苦悩する。人は何かが足りないことに苦しみ、恐怖に苦しむ。

人類の最大の敵はここにある。病気への恐怖、貧困への恐怖、死への恐怖、そして孤独への恐怖。これらの恐怖感は全てあなたの意識に関係し、あなたの心の奥深くに潜む暴力を暴くものである。暴力は常に欲望から派生することに注目したい。人が暴力的であればあるほど、その人の欲望は醜くあさましいものである。

ここで１つ、昔話をしよう。

ある時、長旅をしなければならない旅人がいた。旅人はある獣に荷車を引かせて遠い目的地へと旅立った。この旅は時間が限られた旅だった。旅人はこの獣を「必然」、荷車を「欲望」と名付け、また荷車のそれぞれの車輪を「快楽」と「苦痛」と名付けた。常に目的地を目指しながら、我らが旅人は右へ左へと荷車を進めていった。「欲望」という名の荷車が先を急げば急ぐほど、それを支える車輪の「快楽」と「苦痛」も加速していった。

旅の道のりは長く、旅人は次第に退屈し始め、荷車に飾りをつける事を思いつき、綺麗な装飾品をたくさん荷車に付け始めた。しかし、「欲望」という名の荷車に飾りを施せば施すほど荷を引く「必然」に課せられる比重も増していった。そしてその哀れな獣は曲がり角や上り坂で衰弱しきり、荷車の「欲望」をとうとう引けなくなってしまった。更にぬかるみでは、車輪の「「快楽」と「苦痛」が大地に埋まり込んでしまった。

道のりはさらに長く、目的地は遥か彼方にあるなか、旅人はある日途方に暮れてしまった。その夜、彼は自分の困難を念頭に、深く瞑想することにした。すると瞑想のさなかに、古き友「必然」のいななく声を聞いた。その意味を理解すべく、翌朝早く起きて、荷車の飾りを全て取り外し、荷を軽くした。そして目的地に向けて、「必然」という名の獣に荷を引かせつつ、急ぎ足で新たに旅立った。

しかし我らが旅人は既に多くの時間を失っており、とうに費やされた時間を取り戻すことはできなかった。彼はまた次の日の晩に瞑想した。すると再び古き友からの声が彼を目覚めさせた。今度は、更に至難を極めた。なぜならそれは「手放す」という行為を意味するからであった。

彼は夜明けと共に荷車の「欲望」を手放した。それは車輪の「快楽」を失うことでもあり、同時にもうひとつの車輪「苦痛」を取り除くという事でもあった。 荷車の「欲望」を捨て、「必然」という名の獣に跨り、旅人は行き先に辿りつくまで緑の草原を颯爽と駆け抜けていった。

欲望というものが、どこまで自分を追い詰めるかを、そして欲望には質の違いがあることを見極めよう。粗野な野望もあれば、高揚されたものもある。欲望を高揚させよう、欲望を清めよう、そして欲望を克服しよう！その過程で、快楽の車輪は間違いなく犠牲となるが、同時に苦しみの車輪からも解放される。

暴力というものは欲望に触発され、病のごとくその人の意識のみに留まることなく、周りの人々の世界にも侵食し、そして繰り返される。私の言う暴力は、人間同士が兵器をもってお互いを破壊しあう戦争だけを指しているわけではない。それは肉体的暴力のただ一つに過ぎない。

経済的暴力もある。経済的暴力とは他人から搾取する行為で、他人から奪い、盗

むことによって起こる暴力だ。そこには仲間意識や兄弟意識などなく、人を鷹の餌食としか見ない暴力である。

人種差別も暴力である。自分との人種が異なるということで、人を迫害することは暴力ではないと思っているのか？　人種が異なるという理由だけで、人を中傷することは暴力を振るうことでは無いと思うのか？

宗教的暴力もある。人が自分と同じ宗教を持たないという理由で、職を拒んだり、その人への扉を閉ざしたり、突き放したりすることは暴力ではないと思うのか?
自分と異なる宗教観を持つからといって、嫌悪感をあおり、壁をを作り、社会から迫害することは暴力ではないと信じているのか？同じ宗教を分かち合わないからと言って、家族や仲間から孤立させ、愛する者から引き裂くというのは暴力ではないのか?

そのほかにも、一定の風習や道徳を強いるという暴力もある。自分の生き方を人に強要したり、自分の使命を人に押し付けようとすることなど、他の人が従うべき模範はあなただと、一体誰が言ったのだろうか?　あなたの生き方があなたを幸せにするからという理由で、それを人に強いていいのだと誰に言われたのか？人にものを押し付ける権利が自分にはあると言う考え方はどこから来るのか？　これもまた、暴力のひとつだ。

心の奥深くにある信念と心の奥深くにある信念を見出すこと、そして深く瞑想すること。これらのみが我々一人一人に存在する暴力、そして世の中に存在する暴力を消し去る唯一の方法である。その他の扉はすべて偽りであり、この暴力から目を背けてはいけない。世の中は暴力の終わりを見失い、今にも爆発寸前だ。偽りの扉を選んではいけない。暴力へ走ろうとする、その狂った衝動を絶つことの出来る政治など存在しない。暴力を撲滅できる政党も社会運動もこの世には存在しない。世の中の暴力から目を背けさせるような、偽りの扉を選択してはいけない。世界中の多くの若者が、暴力と心の苦しみから逃れるために、偽りの扉に向かっていると聞いている。そして薬物に解決を見出そうとしてしていると。暴力を絶つには偽りの扉を選んではいけない。

わが兄弟、姉妹よ、ここに転がるただの石ころや雪のように、そして我々を祝福してくれる何の変哲もないこの太陽の光のように、これらの素朴な掟を守ろう。自分の中に安らぎを見出し、それを他の人たちと分かち合おう。わが兄弟、姉妹よ、歴史を振り返ると、そこには人々の苦悩に打ち拉がれた人々の姿がある。その姿をしっかりと見据えよ。しかしそれでも我々は　前へ進んでいくことを忘れてはならない。また微笑むということを学ばなければならない。そして、愛するということを学ばなければならない。

わが兄弟、姉妹よ、あなたたち一人一人に、私は望みを投げかける。喜びへの希望、愛への希望、そしてまた身体の向上も必要である事を忘れないように、それらを胸に心を高揚させて欲しい。そして精神を向上させて欲しい。